



洋学文庫
文庫 8
C 267
1





遭厄日本紀事序

文化初載俄羅斯國人屢寇我北陲最後

官虜其船首兀老尹等七名幽諸松前曲狀事情逮癸酉之歲遣屬官馬場貞由親接得其語是歲俄羅斯船來遂縱之還國爾後兀老尹述其本末為書二冊取利谷兒陀所記附之各曰遭厄日本紀事鑄成傳諸獨逸都和蘭人亦既重譯鏤刻焉云去載和蘭人入貢甲必丹揚谷孤蒲龍和秘齋到江戶貞由以揚谷孤語次屢及松前之事察必有其說結問求之果有之矣切情閱為事之本末載而不洩唯憾彼此之情不通而事理之



相乖者不寡矣、言揚谷孤曰、松前之事、予與而悉之、此書公布于天下、而有此乖誤、吾豈可為我

國家得黙而止乎哉、吾質其非、以為贈、奈何、揚谷孤甚然其言、許而貸焉、貞由謀於景保、達諸

官、謄寫分為本編十二卷、附錄二卷、進呈、貞由尋奉

內旨、起稿、其七月、此僅譯成三卷、遽罹疾而不起、於是

又告

官使杉田立卿青地林宗續譯之、三更裘葛、始能脫稿、乃校訂繕寫、以進呈之、因述其來由、以免其首么尔、

文政八年乙酉冬十月 測量所 高橋景保謹識

凡例

一 此書とと本編十二篇附錄二編ととて別々目錄とを立

甚綜覽を便するに故に今一篇一卷と形し、每巻篇中の

意を掲出する篇目とを以て展覧を便する

一 遠方の情態自か、我事情と同か、其文義を於る亦

然る今此譯篇原意を迫りて、我欲して一辭を修飾

せし要彼の心腸を窺むとありあり

一 此書多し、小形紙に於て、間狭き故に、或は或を以

因り、甘ん得。若し或を以て、且とと辨注及び文意の穩かに

其他注籍を要するとの語を、其按を附録す

一 此書重訂の條を以て音字を添へたる轉訛を以て今
正しむ所ありしを以て字改以て存するも原文を以て
後考すべし

一 里程尺底字の所を邪の體を以て改め翻して是れ
箱と云ふに繁雜を添へんと改むるあり

一 佛羅基西の年号改むるは初めは不歴數を以て和
茶花國と同し但第一月一日和蘭より後する凡十
我國冬至及二十三日あり其夜を考ふ不道古
西洋人新曆を建てる改審して一千九百八十二年第
十月廿一日を以て忽ち十日を増して其日を又昔年間は

三 國を創るの事を書き蓋俄羅斯國今古法を遵用
とあり其書あり考のありん

一 曆數を記し事相系同し月日を以て前條述ぶる如し
而して和系も亦して佛羅基西の曆日を因てこれと改め
辨せしむる所を以て注し其も曆數の年表を查して
其年より改むる所を以て注し其も法を改むる所を以て
其月日を以て注し其も法を改むる所を以て注し其も

景保又識

遭厄日本紀事卷之一上

目次

- 一 兀老尹自序
 - 一 我見^{ブル}序言
 - 一 蝦夷地方航海の發端
 - 一 蝦夷近海都て通船艱難あり事
 - 一 島々測量の順次を定む事 并葛^葛摸沙都加出帆の事
 - 一 往年漂客光をみと送り返す事 并^并論^論著の事
 - 一 使節^レレカ^フ長崎より事 并^并ホ^ホオ^オレ^レト^トフ^フ日本地
- より^{より}乱妨の事

一 エトロフ島はあつて日本の後人との対し并ラソロ人
の達事

元老子自序

元政羅巴人日本の事實を審みたる事人皆知る事
あり昔日事人政羅巴人の多意の事或知まらば其國の
今事政羅巴人因て政羅巴人多く達事して通商
せり風俗の事とも書記さるるものあり其頃の記事ハ
張り多しして事又信まらば其世の風俗の移り多し
何國も同一事あり政羅巴人の通商を禁せられてハ
況も數百年経てりわ日本其事を或知る事ハ
絶てりといふ事

阿索塔人其世の事ありて其日知れり日本を其禁政羅巴

撰り日本人と視る事成りたる事とある所もや
日本領も南に於て國風する事も實に編集はるべきに
とも阿茶庵人の世人の氣を以て北東に風出記の類と
私して編み人よあるに他の政略也人を如何にも互に
お傳ふれともかゝるに物成甚細く阿茶庵人の通譯
ありて日本領の事なる豈能其細成はる事阿茶
庵人の人は國風も事情の精詳と知人と然る事其
心も所及且も此の事と云ふ事

シキエルク ドイツ 曰クルーセンのステルン 叙の記しと按ふる

かつて七條あり阿茶庵の叙も嘆喟也より日本領

瀛海の船路を記し地圖で見ざるも然る事あり
事ありはして又云はる事あり 世に成る事あり エール曰

阿茶庵 此の人の事ありはして其の事あり 阿茶庵 阿茶庵の事あり

國の人を輕くする者のあり 批判あり予毎條を以て解釋

世に成る事あり 世に成る事あり 又云はる事あり

此は國々予り捕りて彼れを車に載る事ありはして
世に成る事あり 餘ありはして其の事あり人よ其れを以て
世に成る事あり 其れを以て其れを以て其れを以て
知る事あり 國の事あり 實に著作はる事あり 其れを以て其れを以て
其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て其れを以て

予も世にもあつぬもの

予も世人の如く或著作を著せりて自己の利益のみを
是を著述せし序文凡例を附けおとし或は他の日書を
志ると或は抜き引記して巻冊をも多量に配りしと予も
予も此れは惟自其の便を以てし或は記載ししもの

俄羅斯國軍艦長

瓦西利兀老手誌

我見序言

原書を俄羅形國語より或獨逸都玉の人カール
ヨハンレキエルクちりその其國語を譯せり予俄羅形語或
とては予も俄羅形國語を譯しし能はざるなり
獨逸都の譯本を有て再い我が邦に譯せし之兀老手
の順序を讀みたるのみは附そはるる事なり但予
譯書成ると得難しなり以て其は後にも予は其
予も再譯し讀者便して於て是を以て予も予也

千八百十七年癸亥十月

和蘭 蘇登白爾健 般我見識

遭厄日本紀事卷之一上

馬場貞由譯
高橋景保校

蝦夷地方航海の發端

千八百十年癸卯

我文化八年
三月和尙

予帝皇の軍艦

テヤヤナ

の長とあり葛模沙都加

蝦夷千島の地より出て
出た大島ありト云はる

子有る所

帝都より海上総官より南方よりありクリル

島

クリレットと云ひ蝦夷人チユッカと云ふ我等千島よりクナシリエトロフ也
は該島の南より外志の島

サントリス島

西白里亜の南方ありウダ河の口あり島

サントリス島
又セントル

北極出北五十八度二十八分の南よりオホ

ツカ

此名下の所を百保按は北の府即韃靼の海を治りてオホツカ

オホの地を精しく測量せしむるの今書る事なり

此書中より南より北海上流の役なりとの別籍

二箇を詳ありてあれども別籍の事は後述の後述

東人なるを飛船の候に考ふれば北をててカムサ

ツカは少くかんは極を毎に考ふオホツカよりカム

サツカよりて飛船の事あり其三度の

飛船もこの四月二十日我三月カムサツカのペーテルハウ

ルス地の港に着れども彼別籍の事は後述の事なり

までも右の副籍 オホツカよりオホツカより

又帝都へテルスブルク

係按は此都我元祿十二年伯多福帝の創建せし北極出北字廣あり

よりオホツカ一の飛船の事毎に月より度之候に

ヨホツカより四度の飛船の事なりても是より為

一月後より必定期に己より考ふれば果して

てはけ河の流より帝都より通路を

絶つ事なきを以て彼副籍 オホツカより

回りの港水通る事も運送の船悉くカムサツカより

越年しこれオホツカより是を運送し能は

る此有る事なるを以て今人々を以て

船を出してカホーツカヤを往きり処あり尤カホー
ツカの方也

第二卷の甲西丹名成ニツイケトシ

とらも既には度測量より出船の先カホーツカヤを
船中荷物の食料を測く山の所の港より船の修理成
らむにききし書籍より云ふをとりしと船
此意を修理の出るる程の大船あり唯今此意
乏しかりしとゆふは港より航路を運送
船のデイヨ子イニフス船三月は休るなり形と接し
とらも事缺され今度海測量成始りしカホーツカヤ

ありしに船れども只てらふはさしと帝都より副船
ありしにあり尤も本船より大船よりありしに
船よりありしに測量より何れも事代揮字
而して其記をとりしとありしに船れども
何れ船の仕立より何れ船よりとせしと事代
解せしと云ふ事代其事より孰れもみれんと云ふ
事代内の子ありしに彼副船よりありしと測量
とらもいふと云ふ事代ありしとありしと事代
副船の事代より事代ありしとありしと副船
事代ありしと云ふ事代ありしとありしと事代

入洋はふふのしと決やしと

蝦夷近海都て通航艱難なる事

かつてクリル島海を航せしものは此島は至るを船を置くべしと
海客の記ありしときうあるは心の供は由きて湯を以て
能くしるは成致たり予去年亞墨利加よりクリルの
連塔に泊りてカムサツカ島の船を以てしりては
初より不知なる月の海客を通航するものありは海客
は其後をかくし流塔の海客も其を船を置くべしと
帽子を以てきたるは一俵の船はひは通航する
艱難なりと眼あるは危き事はなすしるは船を置く

アレウト流塔

カムサツカの東海にあり
一帯は遠くはるしり

クリル流塔の客あり

甚なる島の流塔ありて是よりしるは海客の浅海客も
能くしるは流塔を解するは三十所年の事ありは船の所
二百所の繩をとりしは尚海客を置くは船を置くは
るを考合はるは予此島の事成致するは其の時候を
推してみあつし彼流塔の流塔も一熟するは舟の
船を置くは流塔を解するは船を置くは

千七百七十九年

安永

年 二月 廿二日

船 人の死

レタルシヨシテキスエヘイと云る二艘のアシケリヤ船

ゴーレと云る者船とありては是等十月九日 秋九月 十一日

アワツカ

アムサツカの前
名のある港の名

と出航し亦てアサキにありクリル

の跡に浅も初付せんとて一は崎を舟一島のスムチヨ及第ニ

島のハラムシルのて我程好て其船を風吹たて船

出てもさあふと能くさるるしとあり些許をアサキ

後第十月ニテ

我九月ニ
十八日

少極出地四十五度五分の北に

あり地をアサキとて是を日本のおまの地ありし

とて此船目のコーレ者又クリルの七度港を視んとて

とも風波の毒よさくられて遂に北を道なりしと

なり已に此コーレを第九月の末我月の末の末はアワツカの

港を出航せし者ありしと能く第九月十月我月の北

クリルの崎に我船ありしを直しとて是の時修る

千七百八十七年第八月中旬頃

秋八月四日
七月下旬

ラベロリセある

との少極出地と松あり

昂極出地ありて和人松ありて
極出の地名ありと思ふ

の者あり海を航せし時アニコ岬

由極少極出地
のシレトコあり

とて

スターテニエイラント

第十九島一名エトロウと云

由極少極出地スターテニ
ラントよりナレリをあり

のトロリとて岬をアサキとて是四月十九日我月

の事とありしコムハリニイス崎

第十八島一名ウルツブと云

由極少極出地
コムハリニイス崎あり

エトロウ
島あり

とマリウシ

第十の島一名シモシリといふ

との間を通過せしめしむと此の島の間の海門を渡り
乗るる船の名は成りてあるはラホウシ海と名付るるよし
其外流海も成るるよしはれともその名を流海とありし
て多るは自由ありしとあるよしはカムサツカは
海船なりしは第九月初旬秋旬の事なりしと

甲子丹 サレイチエフ 各

尚ほ海上鑑賞の役をばとむ

かつてシベリアの東北氷海を東洋へ航せし時の記は
曰く鮮海とありしをんふありし七百九十二年第八月廿
寛政四年八月三十日はカムサツカのアワツカ港に出帆し針路を西
南にかけクルルの島に達して航せしは陰をたふありし
して始て同月の二十日朝に地ををえりけり

是より北極出帆四十度二十八分のありし

此の島より北極に達するは漸くは海漸くは
空を霧あつてありて地ををえりけりありしは
セー——オホーツカは海にありしは北極路第五第七等
十二島の山並は第九島の南にありしは北極路

海に多し其海を海宮と云ふ事と能く云ふ事
千七百九十五年 實政八年 アンケリアの船がフロリトンある者
松本の南岸にユルカレス港を出て漸く松本の南岸まで
ありよりクナシリとエトロフの間を通り

は者多クナシリを松本の南端にて地産の地と云ふ
エトロフの西より北に松本の南端と云ふ事と云ふ事
フルツプ 島の西より北にシモシリの島を通りてケイスは着
シモシリケイトイのニ島 是より南にウルツブエトロフあり
ウルツブ島の東よりあり 是より南にウルツブエトロフあり
クナシリの南に海を通りし事と云ふ事と云ふ事
湯屋の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

十月の始の 九月末 の事と云ふ事

千八百五年 松本甲必丹クルウセンステルン 日ありよりカ
サツカは海にありし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
月の末より第六月の初 五月末 の事ありし事と云ふ事
海をより第七月の中旬 松本より七海船よりあり
八月の末 七月末 ありし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
高松の海針次官クリセイシ 各製せし事と云ふ事
然れども其海のクリルを海の氣候ありし事と云ふ事
クルウセンステルンの船の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事

予此度の企む右の石あり。毎所の役とるは事としみかつて
クリルの地より海へ彼地へ行く者もあらずとカムサツカ
の内を捜索せしむ其一人をたづねてあつてあつたを以て
事とも成るや同し。此者ありてあつて航海の拙うこと
いふるその所其いふ事一として用ひる事あり。原より
彼をカムサツカの極めをたづねてカムサツカよりいふ
クリル地をゆく年貢取取取めは諸君之時彼々あつて
あつては彼地身の中の大なる好もあつてはこれありとも
そのこの事をして幾らありともいふ事あり。と云ふも是は
唯かゝり心づきもあつたる事あり。と云ふも是はこれありとも

風の音も風の強あり。のゝ島への所在も諸君の事
かゝり心づきもいふに彼ら事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
此等と云ふの事あり。又高船の船司の次官ホカシトフと云ふ
クリル名あり。諸君は針次官のアニセイウと云ふ事あり。
彼ら第七月の初旬我ら月よりクリル地より海へ行く事あり。は
各候甚だしくかゝり心づきもいふ事あり。予は去年第七月我ら月
カムサツカを出帆して西へ去りては諸君の事あり。は
船中より海へ行く事あり。は天候よくては諸君の地へ行く
雲の終る事あり。は船中より海へ行く事あり。は諸君の
は海の事あり。は諸君の事あり。は諸君の事あり。は諸君の

八月二十七日 晴 夜のついでにのちかき明くは是より
考ふ予り意を聚りし事成遂むるに於て九月の
こゝに於て九月の末 旅四日の末 申すもかゝるし 且又
風をよむおいてるまゝに物も地味色く 舟と云せ霧物
ありては海舟の多き 測量は極よきと云ふを
必三年の内にしししと云ふの程を考ておしむべき
時をとりてはまゝと云ふは可なり成るべし

嶋々測量の順次と定る事 并カムサツカ出帆の事

予此度の業成遂むと云は終成考ふ先カムサツカを出帆
しておしよマテエアと デシヤワ島の内なるナデスタと云ふ

海門をかきうては是のそ 舟を測りて時年を計りまゝ
南方クリルの諸島に於て先年中必丹サレトチエフ島の祝
ふるケトイ島より測量成初めは是より南方の諸島に
測り極めはありみ松本とエトロフの内をかきうて松本の
小島を測りテロウセの海峡 由振よりヤとハ 坂東地との海峡 に出で小坂東地
の東岸に泊りしよりい 龍巻の海舟を並にサンタリスの成
測り終て其の事をして悉くは業成成就とんと成り
かゝるに 預め測量の順次を定ては自ら船務の
あまきなりて舟中あまのふり後程をりさるる程にして
八月二十五日 九月三日 氷を破りて舟をベートルバウルス港より

アロツカ純^地のこゝに五月廿日^{我三月廿五日}破を揚ては我出帆をり
予既^地の地の言のこゝにナテスタ海峡に於て酒を成
す^{我四月廿日}免^地ち^{廿四日}第廿月^{廿九日}南^{廿五日}第^{廿九日}チリク^{廿九日}リル^{廿九日}第^{廿九日}三^{廿九日}倍^{廿九日}ラ^{廿九日}ヤ^{廿九日}ワ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}四^{廿九日}島^{廿九日}ウ^{廿九日}セ^{廿九日}リ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}五^{廿九日}島^{廿九日}
ケ^{廿九日}ト^{廿九日}イ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}七^{廿九日}島^{廿九日}シ^{廿九日}モ^{廿九日}シ^{廿九日}リ^{廿九日}一^{廿九日}右^{廿九日}マ^{廿九日}リ^{廿九日}カ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}七^{廿九日}倍^{廿九日}ナ^{廿九日}リ^{廿九日}ホ^{廿九日}リ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}七^{廿九日}島^{廿九日}
マ^{廿九日}カ^{廿九日}シ^{廿九日}タル^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}五^{廿九日}島^{廿九日}ウ^{廿九日}ル^{廿九日}ツ^{廿九日}フ^{廿九日} 由^{廿九日}振^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}五^{廿九日}島^{廿九日}ハ^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}八^{廿九日}島^{廿九日}ノ^{廿九日}西^{廿九日}ク^{廿九日}ハ^{廿九日}有^{廿九日}ル^{廿九日}第^{廿九日}十^{廿九日}七^{廿九日}島^{廿九日}
七月十七日 我六月十日 行^{廿九日}ハ^{廿九日}ハ^{廿九日}初^{廿九日}テ^{廿九日}日^{廿九日}本^{廿九日}人^{廿九日}ト^{廿九日}由^{廿九日}進^{廿九日}ス^{廿九日}ル^{廿九日}是^{廿九日}を^{廿九日}以^{廿九日}て^{廿九日}中^{廿九日}を^{廿九日}始^{廿九日}る^{廿九日}事^{廿九日}を^{廿九日}成^{廿九日}す^{廿九日}事^{廿九日}務^{廿九日}深^{廿九日}く^{廿九日}し^{廿九日}て^{廿九日}其^{廿九日}の^{廿九日}事^{廿九日}を^{廿九日}知^{廿九日}ル^{廿九日}事^{廿九日}
その備に始るとありしを予日本人と推定す一並に

其後の始末は記さずんば先我と日本との古く在り
國政にかゝる事あり予り此を知りしは此の或る事
たのこし

往年豊後岩光が代送るに事並に流書に事

わ^地我^地者^地と^地己^地は^地三^地十^地年^地來^地日^地本^地の^地高^地船^地破^地擧^地げて^地アリ^地
ウト^地崎^地の^地深^地着^地り^地此^地舟^地を^地光^地吉^地と^地云^地は^地若^地無^地事^地は^地未^地だ^地
横^地ゆ^地て^地イル^地コ^地ツ^地カ^地 此^地の^地事^地は^地未^地だ^地と^地云^地は^地若^地無^地事^地は^地未^地だ^地と^地九^地十^地年^地
終^地に^地女^地帝^地カ^地タ^地リ^地イ^地ナ 保^地振^地は^地和^地宮^地第^地十^地二^地年^地即^地位^地也 彼^地等^地の^地政^地カ^地ホ^地ツ^地カ^地より^地
亦^地由^地て^地送^地る^地事^地あり^地と^地云^地は^地未^地だ^地と^地云^地は^地若^地無^地事^地は^地未^地だ^地と^地云^地は^地若^地無^地事^地は^地未^地だ^地
た^地き^地も^地一^地代^地言^地被^地あ^地へ^地き^地る^地代^地シ^地ヘ^地リ^地ア^地の^地書^地ル^地ル^地事^地

そり位其の供者も之を官の者に置けり此は是より我れ持せ
女事と云ふを以て鄰界の者なりと云ふは誤りなり
又船司也アニケリア國或はオランダ國の者も置けり此は
て昂ち子七百九十二年 覽改 の種なりゴルより甲必丹
の汝友ラックスミンと云ふ者汝供也とてカマリヤと云ふ
運送船よのをロフソウと云ふ者汝船司とてカホー
ツカと云ふ日本より遠く己ヨラックスミンハ松本の所なり
着船しは年々子ムロと云ふ小湊に航すなり其年
復も此にて漂ふ所の形も因て舟次第彼の湊に入るは次第と
云ふは松本の南西の地にしてサシガン 申梅は津野の
湊なり 海峡の所也

何れ此を以てあひてラックスミン日本の都府より置れり
有るは應對せり其の儀執事なり國人の儀に書り
たのめ

第一條

日本の國法は因て其隣の湊の外我れ置る者も人
悉く捕し生け置めり其の控られとも俄に人々
置て其控を奪ひ其國の海濱を其ゆきし
我れの人と送り置り其は此處に許して亦由り
歸るに命置るを隣の外日本の海濱を其ゆきしに
置り又此處に日本人被船して俄に其の海濱を

漂着する者あるも日本に法を以てしる事ある
其是を犯す所を御判終るべく一節一節ある
の法に依るべし

第二條

此度交易の人を送る悔しき事をおわて我執
政も是を益稱せし能れどもは者をつれども
み殊しきとも心は任まじし其故に其交易の人
不幸にして憂あるは其の外國におわては其
全ある者ある所は其の者しるるべし其の
為法あるべし

第三條

交易のりるを我國の控えて其後の外におわて是を
儀とせし能れは其の甲五舟ラツリスミンは信購と
典中其の持領し其の其の法に依るべし又
其の其の其の其の其の其の其の其の其の其の
事におわては

ラツリスミンを此條書代持て千七百九十三年 倫敦の
秋カホーツカは海船せし其者の後におわて日本に人
其の其の其の其の其の其の其の其の其の其の
を以て其の其の其の其の其の其の其の其の其の其の

賤しとあり又種々の言語物とほつり得べき憾あり
日本のは法よりして市井成徳とて御細とて事成許され
始終高人整固とてあり何れも女帝此ラックスミンの
御縁は直に船を乗渡りてとありとありとありとありとあり
其は其拂良をあるの兵乱御縁は御縁は御縁は御縁は御縁は
是正とて多かるべし

使節レサノフ長崎より参り并ホオシトフ
日本地より参りの事

千八百三年 三島 参りの事 保梅より参り の側用人レサノフ成
して日本より参りて此参りの事併に甲西丹クルウセン

ステルンの参りは詳ありみ彼自ら参りて事あり
此レカムサツカ出帆の事は参りの和考を成るは其参
日本の参りよりレサノフは参りてあり其文は俄参りの
舟を日本の海濱より参りてあり此参り風波より参りてあり
破船一航を其他の不幸より参りて日本人俄参りの海濱より
ありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
よめて返りてレサノフは参りてカムサツカより参りて
後参りてありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
のり無事利加ありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
陸地レハリアを通りて参りて参り都へトトルスブルクより参り

らんとして旅中を病をうけて終に死せりみ船司の
ホオシトフを再びホオツカ城出發してクリルの名ゆゑ
ある日本人の村を城郭跡をう其跡をホオシトフ及び
ダウエドフ昔より紀伊の序文は詳あり

海上總管の次官スコフの文なり

こゝレサシク並にホオシトフう世にあふは二人の以成
洋の知よりれども古人とありこれに遺憾あり一は
我執政もホオシトフの所為成たは恐るる事あり
端をすくはして明く之を予もみ取て死せしこと
非ざるを又端を以

予方クリル南方の海に或測量はししとの命成蒙
はるふより甘南子の海より日本人居住する事と
及く此をホオシトフの彼地より船路を以て所以
並に其地を以て心ゆく彼地と心成配里し
幸其時ホオシトフと同船を以て按針後を奪て其地
間にはホオシトフの序文にて日本人と語るに
今も自己の意より出さるやして豈一國の事より
して僅に二艘の船を以て他邦を侵はる事あり
やと其國志を定めて其地の序文ありと武威の強を
ある事明なるを以て彼ら自己の所為として王を

あまき事な編成すはて知るべしとあり此挿針紋
の語者予ゆてカムサツカをめぐりし時高館の級人
マスニコウと云ふ者の預りしと符をせり此者ホオシトフと
は以同族をく者之予是等の語を尋て日本人の
眼を奪みし事成忍れ是る者よ日本人は争うと成
形を奪ふた非は喧官より常ありしと語り
日本人と推察せらるる事 ぬきし交あり日本人の
任右はる島の西に旗を立はして通つた彼ら
物に驚きしを人と思ひしふ委悉く予は意と
おもひせり

エトロフ語は於て日本の役人は應第一番
ラソワ人な逢事

第六月十七日 五月 俄にエトロフ語のフ端と云
思ひもくはは島の山の盡ツレの西側甚山に幾の
くをくく云其は島のシヤナと云る港をく其海を曲湾
て其其海門のぬく山のくつれめ地をなぐくその中の
くくふんえくく甲必丹フロリトン欲も此の海門を
湊るや成箱くさりしりく彼を害する地馬を以て
甚分ぬるは有は是成エトロフのフ端と云思ひもくは
何心なく地成録し事九里餘の処まで出たりはあ

陸地を以て海を以て人家多し二艘の小舟海濱に於て流す
一より固より此流もまたクリル人のこ位にせしと名じ
一より此島の極子其外心なるある處事代尋多求
ゆんと小舟の兵を以て備へてモイ子マン館モール故並子
指針後格のナウ井ツケ故小舟にして陸地にせし
亦もあし予陸の方代えぬ陸の方より小舟代
出し我舟代を以てある極子なる何なるは此の主人
我舟代を以てや更よこを以て我舟を以て亦船代を陸
色く家よりせすもみこイ子マン館のヤリウスキン故を
はれ兵を以て備へてあゆみのこあまア人の漕をせしとの

舟を舳りんと急を以てり其方より出さる小舟を
先に出る我舟のつけ直し二艘を陸地を以て漕
ゆけり予り小舟もやて着るゆり上陸して為るぬ
豈行らんやモール故日本と應對せり予は兵代え
たは聲を以てぬ極ありモール故予よりゆり故は
我舟の内等十三名のラソワ人あり兵を以て其島風の
考も此流さるる我舟日本凡人二年程捕へるは
免し我舟を以てゆりんとせり其島に在る我日本人彼
命して何のゆり我舟を以てゆり船と寄りてゆり
且日本人を以て極を以てゆり上陸を以て人代

たのめりとあり予は事代はてすしく驚きし心弁
甚ありしはしして此くモールは向て白くテソワ人より
は驚きしをゆきし何なる予は指馬もくけは日華人
と應對せや強は僅の人数を引はれて我々の
ま心と引出さくや又テソワ人よりはるきをゆきし
何なる予は事代通せきと信問せし
りハモールはてし予は事代はてすしく驚きし心弁
腹痛者ありとて外の者を再ひ上陸せしむる時
予は恥辱ありとて是をなすモールは道は
して是等の思をもあり予は驚きし心弁

帰るて指馬は待てし己の才ありて侍る顔七んをあり
予然しては其のモール予は指馬を彼に此山を
日本の名ありしと云り其人は元は離れ演也は
其の指馬は甲冑は着し七種の剣は持し銃砲は持し
者は二十人なりは驚きしとて列をひきしは右はは銃砲は
持て火の射る火繩を握り予は後をひきありて
初を施せしは彼を右の山代額の巴子て揚け體をふり
是の是の是なり秋をて二人の通事代は彼を後を
是通す一人はテソワ人なりは彼をの士卒也又一人は
しは偽薩形強は解は我領内のテソワ人之日本人

先回て曰く何の用あるて此をのみ申すや逆を成すは
交易の考を尋ねる者ありは海軍の道に法の方よりあり
フーレツとして此海軍の事なきは飯ありと予をて曰く我
等の舟ありたりき淺水船を新水船に改めんと考ふれば
其を改めたる新水船は入水ありし長所より出航は下

予部の下へて之を一舟を有するき淺水船を求む
考ふてある所ありし精々湯屋一其の事候も當り
せん考ふ所ありし此を不事と云ふは其の終て日本人
の情は好むるありし徳あるべき人物を求む他あり
唯其の好むるを以て皇國に湯屋を審視の考よりあり

船を仕出れし事の解しは之を因て二重をいし
即ち精心を起し居るべき也

は外航より付て心を痛む事句れは其は船の事あり
事の船之みかても其我を以て考ふ事あり予が我々の
七を以てし應きてみ日今依る船の舟より其の成りて
日奉人其其値もありし其一人ありし其は其の二年
以前依る船の舟より其の事ありて日奉の村を以てして其
ありし物を悉く奪ひ取りし人其後其の事ありし其
候拂りし其に其其の事ありし其の事ありし其の事ありし
日奉より送りし其の事ありし其の事ありし其の事ありし

船の事々々時宜くおのれ等の官制を新に改定する所能なり
また波の形好く事ありて一帯に日本地より官制も亦
要すの事成すも船の事々々以ておのれ等の官制も亦
押入れを好く事ありておのれ等の官制も亦
いふ事ありて一帯に日本地より官制も亦
はラソ人の官制も亦一帯に日本地より官制も亦
と大臣固道せし心平二年を生し一帯に日本地より官制も亦
予りて一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
官制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
英園と軍制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦

同一は彼を事々々一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
やと官制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
いふ事ありて一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
小船を出して日本人と一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
大園の事々々一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
高船の事々々一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
この事一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
官制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
は恐業成ありて一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
官制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦
官制も亦一帯に日本地より官制も亦一帯に日本地より官制も亦

其船に被せよ再び其船に乗りあはせんと欲す
我國主言日本人と戦んと欲す其船に直に乗りあはせよ
年々船の船を造りて其船を造りてのりぬる
日本人もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
你もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
ホオシトツラ捕りぬる二人の日本人の何れもあつた
あつた彼もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
あつたや船に乗りあはせよ其船を造りてのりぬる
予もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
フーレベツトツラ捕りぬる二人の日本人の何れもあつた

是を彼もあつた船に乗りあはせよ其船を造りてのりぬる
食料を以て其船に乗りあはせよ其船を造りてのりぬる
是を彼もあつた船に乗りあはせよ其船を造りてのりぬる
予もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
カムサツカ人其船を造りてのりぬる
サラシナ

ウヰルデコノローグ 樹若草の酒の層

是を彼もあつた船に乗りあはせよ其船を造りてのりぬる
かゝる船もあつた船を造りて其船を造りてのりぬる
其船を造りてのりぬる

と船を造りて其船を造りてのりぬる

飲て可成我飲あまふふふふの擧ぐふ所の擧言を國書
 の燒耐を也一彼玉風は遠い毒あふ成程はさう為る自
 是夜試て彼もふふ何れも甚き美し一合後飲一吐
 飲も多飲ひらきさ予り飲さる酒成多ふなり成
 少一揺して謝さる辨を也一毎日の成程の上
 揚て彼も打さる大纏をなげて一見一終て正に時也一
 切てくもささあふふもま物とせ一とそ長時を成て把
 与えり予又そあの子をさるなり一成さるおふあま
 家も其あの子いれり其あふも甚しく酒根をさふ及
 蒲の席をさる酒い肉をさるつもの志きり人只各別す

皆用句を也あふふふふふふふ入口かあふつ只其あまの
 若ふのそあふもさる美あふも成あふつ其よは和ふ
 の脚を十字のちあふつてあふもさるはその中其あふあ
 あつて傷は態の酒をさるをさる一はあふの衆あり
 其あふもあふ成程一その彼ああ成さる合意はさ
 之を知れ其あふも思ふ色はさふ及び能其後よりさる
 其あふもあふ事成程一その成先け再さるを成して
 其あふもあふあふ

予海濱に於て彼もあふも極老人も情を好むる体も予り

傷まらざる事ありは島のクリル人凡て男女老若人等を
しりし日本人之者一々壓傷をうけて日本人のあ
らざる其望成さざるありし其思ふ事其解成事一
も其思ふ事其解成事一々其思ふ事其解成事一
恐る事其解成事一々其思ふ事其解成事一
申けあ事其解成事一々其思ふ事其解成事一
クリル人其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
見ん事其解成事一々其思ふ事其解成事一
日本人の思ふ事一々其思ふ事其解成事一
事其思ふ事一々其思ふ事其解成事一

之解きまはしむる事一々其思ふ事其解成事一
さうし其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
逆心ありて事其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
年其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
難し思ふ事一々其思ふ事其解成事一
彼其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
其思ふ事一々其思ふ事其解成事一
其思ふ事一々其思ふ事其解成事一

を知らずいふものゝ既には我お出航ありおウシトフ
の如業を倭寇が盗國のくはけりおと世家せしむと唐
云出しよまことしあつらうし一先日本人より我者自よ
ホラシトフのあをそとせしむるは其能あし人
能あし人しとせしむるは其能あし人し
人おすを慰めて曰日本人を皆倭寇人を憎む
よまあし其能あし人のせいの能あし人の外
能あし日本人あしとあし倭寇人を憎む也
よまあし其能あし人のせいの能あし人の其
能あし其能あしは其山の海濱に漂着せしよ忽ち八人の

出でて其能あし捕へ入字をし一先は其能あしホラシトフ
其能あしの其能あしを其能あし其能あし其能あし其能あし
彼ら其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
ツカの者よ其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
自己の其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
倭寇の其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
お其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
く其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし
お其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし其能あし

焼酎を飲せよと二盞のて焼酎はかすお解して酔ひの話を
あはれゆるるもて狩り申せり火薬おもしろし人々
何しそにわかれしは是のこゝろと教ふるといひて
あゝかあよとてのさきまで重きおまひをふ物も
あやし物なるべし予彼よ火薬すポント
ぽポントハ 燧子一ポント 硝子の珠及び耳薬を
添へてふえりはあつた四時ふたふたはる法を止て
備へしむ但ふらふ時も若み我々の逆をこらふる
をいふ人よふかぬものも嬉しし付せり此クリル
人おまのたれん言ふはシイチマン館 じらートフ館を

俣根のポントハ徳の名
我九十九のあみあみ

陸を走りトヨシぬみ行きて懐くのを以て思ふ存
若葱の交易をせし程のやき或野に打たれり
予はもと病人の為に狩りし也
第十月十日 檜月のおかき海上静かにてあゝの風も
ありおのびたむと出航しきり能くはてあはれ海を
あきりおのびたむと出航しきり能くはてあはれ海を
是れ日本へかたけの宿むありしとあゝおとひいり
あゝおのびたむと出航しきり能くはてあはれ海を
風もあゝおのびたむと出航しきり能くはてあはれ海を
やうちをたぐひるにやあはれし色ゝあて能く是れを

己の心は多岐と見え、ふなき心は舟の舟と見え、
時をたふすやうな後をきく、クリル人并 アレキセイ
マヒモウ井リ錯と云仕年二入ぬ男女数人すれう凡男子
の徳をよそく、身幅序く袖を短くして、唐く紺地に
志らくして、徳ある日、孝流の徳を著せり婦人其名の徳を
識りて、徳をよそく、少りまぜーハハカーイ
申掛海遊時のおん
エトヒリカと云の嘴と云、余をそ藝あきく、とと飾りかけ
其を申掛、そそらるう、皆海極の海を造り、筒の長
き、徳をよそく、但エサウル
申掛、は所未解、乙名充分の者
指りマシヤルカカハ
をさう、俣掛、はマシヤルの
サワカの名を、乙名と云、ふ、素足、あう、う、我、あ、は、出、逢、し、ま、

能て同、一、襪を、た、さ、う、て、後、予、う、あ、は、多、く、日、年、人、は
今、あ、ら、く、徳、成、在、ぬ、て、初、を、と、あ、や、う、因、て、思、あ、は、素、あ、ら、う、ま、
き、う、人、の、あ、は、あ、ら、く、を、礼、と、さ、ま、の、お、も、う、さ、う、一、は、エ、サ、ウ、ル、ハ
自、然、カ、キ、年、身、し、う、て、甚、く、老、弱、の、徳、を、思、う、う、
終、其、少、女、と、膚、の、あ、ら、ひ、短、く、て、あ、ら、う、け、は、徳、あ、ら、
男、子、の、髪、を、皆、濃、く、一、て、思、う、一、但、あ、ら、あ、の、車、を、か、く、
人、の、と、と、ふ、や、う、う、其、外、は、徳、徳、を、飾、あ、ら、う、婦、人、の、
唇、の、周、り、ほ、こ、り、さ、う、り、あ、ら、う、の、子、は、若、く、深、く、う、徳、あ、ら、
高、物、と、一、て、徳、徳、二、ヒ、ユ、ト
俣掛、は、ヒ、ユ、ト、ハ、海、の、石、凡、我、三、年、ハ
右、四、十、月、よ、あ、ら、う、二、ヒ、ユ、ト、多、く、あ、ら、う、
言、ハ、外、は、若、者、と、若、者、と、成、あ、ら、う、深、く、あ、ら、う、

彼が病ももたせしむると彼をさるる令く此の病と
別れては彼が此の男子七人女子六人少思二人計で
十人人をなすはあつて一程は少くは少くは少くは
少くは少くは少くは少くは少くは少くは少くは
病を何しは彼を後程に彼まで云々と能くは其
彼の病ももたせしむるとは云ふはケウルポイリ
血液は腐敗
する所の名
と云ふは少くは日本人は彼を懐くは少くは少くは
少くは日本の医師の療法やあつて彼の病は一人
少くは後病を昔に是れ病急急の病を患ふといふ
あつて日本の医師に云ふて是れを療や云ふといふ

初めに彼より血をなすといふ其は血や一たりは
其の病を云ふは彼を後程に彼まで云々と能くは其
彼の病ももたせしむるとは云ふはケウルポイリ
血液は腐敗
する所の名
と云ふは少くは日本人は彼を懐くは少くは少くは
少くは日本の医師の療法やあつて彼の病は一人
少くは後病を昔に是れ病急急の病を患ふといふ
あつて日本の医師に云ふて是れを療や云ふといふ

並に山火をいふは必やと可し然しとあるはさうし
形しして彼れは必日本人の教するに非ざるの
法也西きて是れと云ふも此れは只ウルツク名のみならず
持てるは付し用しは其のあひまを伝へて物語をも
急しむるありし風を行ふのそとらみろの法也
嘗て此れの本を其の法を也後と云ふは若し其れ
久しし此れ山のそとらみろの氣候を温るし由此の
形を記し其れをの急しむるは風も久しし此れ
は其のめしむる雲霧の法もいふありし上ト口と云
ウルツク法は此の僅しと云ふもいふれども彼れをいふ

やうな形も此れも不彼れは此れ無敵なるも其れを
此れにともあり彼れ無敵なるも其れをいふと云て其
くもその形も此れも予り此れもいふも其れをいふ

此れ無敵なるも其れをいふ其れは凡そ唯方位をいふ
のこそ其れを記し此れをいふ此れは凡そ唯方位をいふ
其れをいふ此れをいふ又螺^子旋^子蓋の^外也

細むは此れもカムサツカよと云ふ

彼れは此れも此れも此れも此れも此れも此れも此れも
若し其れも此れも此れも此れも此れも此れも此れも
日本人も此れも此れも此れも此れも此れも此れも

予は家あり日本人を知らんを以る志意ありと云ふ
又云家ありはくろを以ては難を免む人爲事ありと云
又云予て己字を以て船より上りて海あり物事せんを
此世にゆくはくろと出づる難を免むと云予は彼に向て
我事より日本人と云て害を免むなりと云日本
人を汝も我も知らんありと云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
抑良寛國策の焼耐を嗜むなりと云云云云云云云
四圍を知り汝を以て彼を以て了と云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

船を以てくろと云ふ事ありと云云云云云云云云云
時を以て難を以て思ふ者ありと云云云云云云云
予は彼も予を以て汝を以て能くはくろと云云云云
又云キセイ一人を以て止む彼も予を以て日本人は彼
なりと云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
息を以て予を以て云云云云云云云云云云云云云云
依は彼も人其事ありと云云云云云云云云云云云云
一人を以て彼も大抱の時と云云云云云云云云云云

遭厄日本紀事卷之一上畢

遭厄日本紀事卷之一下

目次

エトロフ鳩出帆并ラソロ人交易の話

クリル人お鳥獸を捕る話

クナシリ島よ着岸一危難の逢事

クナシリ島よ上陸一日本人と應對の話

日本人の欺り虜とある事

遭厄日本紀事卷之一下

馬場貞由譯

高橋景保校

エト口出帆並ラソ口人交易の話

此日午時よりて天候は南風強く吹出たり云々
島の東岸より湯量りて入りてありてクリル
人等を得て一しの暇を悉く揚て船を東へ向て
クリル人の家へ入りて舟より舟へ繋ぎし所より
人出皆少ありて舟より舟へ繋ぎし所より
ありて舟舟係は漏りて此れもまた一は是也

船のむとて昂舟の引込や〜のたき何は〜にて彼も
 云々を修羅形人等〜日本人仇を〜たぬ
 日本人の船員人等尚難志を奮り予を以て
 彼等を修〜備〜彼を〜るを修〜る彼等の
 性徳を〜つ〜思ひ〜の言易い事〜と
 又も其の〜時を〜威〜かき舟舟
 より各おた〜と苦〜と希や〜成りけ又
 日本人の船員人等〜言〜て若くは〜海を平
 悪く言々若くは〜と〜人といふ〜
 上ト口フを出版〜てウルツ〜あり〜は其の序に

況て湯舟ヤリ事三言此等の〜フリーズ海陸を
 てフリーズは船人と云〜と逆風〜と能く
 ようて南の方を舟を向けて上ト口フの東の方を
 況る海軍を〜船員等〜通舟の爲に法を〜
 アレキセイを〜事〜日本人の害を〜と
 尚難〜や難も〜予は〜の思〜と云〜
 予思ふよ〜と難を〜の難を〜事〜
 態を〜守備や〜めん〜と〜
 宜〜時海中の者〜戦争の調練を〜
 昂ち人数を三隊〜其の隊を大砲〜隊を

予の鏡其三塚より手鏡と鏡と成りて各鏡凡とこめて
是を秘つ作法とありアシキセイ此作をアんで忍
峰屋の歌あり其時予彼を推して曰予お日本人
秘人より日本人の秘事を秘人と成りて因て其
信樂の考あり個法とありあきあきなり其のこし
秘事とも彼あり秘事ともあきあきなり彼も
あきあきなり其時アシキセイ此作をアんで其時
予の言と伝はるる傳をあり秘事とも心弁る秘事
似て秘事もありありなり種々の法とあり予その
秘事とも其の理を秘せたる事とも其の秘を秘せたる

あきあきなり予クリル人と日本人との交易の事
聞ゆる秘して告げ凡て此事より聞ゆる人其も
あきあきなり其時予彼を秘事と成りて其の
日本人との交易の事成りて其の事とあり予
知る秘事なり其の秘事とあり其の秘事なり其
中の秘事を秘する成りて其の秘事を秘する事
實事多かり其の秘事なり其の秘事なり其の
しるし人其秘事なり其の秘事なり其の秘事
小官の秘事の秘事を秘する秘事なり其の秘事
なり其の秘事なり其の秘事なり其の秘事なり

の船をもち日本人と交易成るを——成すはうりある
へのはうりある——交易の——成すはうりある
あり省目出で成る事と成り其交易のあり海裡
の船の良能の尾更成を船の皮く
アサラミ

日本人を船の皮く成すはうりある

日本人より成る物も本船の皮く成すはうりある
成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
三億を以て成るの皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある

成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある
成るの皮く成すはうりある——日本人を船の皮く成すはうりある

一 最大の海裡の皮一枚は六億の米十億は又一億
の米三億三億ト 我土をとも成る海裡の皮一枚は
三十億ト 成る海裡の皮一枚は カムサツカはあり
亞墨利かの高成りして一億ト 三億の皮一枚は
の米十六ループル 成る海裡の皮一枚は
成る海裡の皮一枚は 五十八ループル 成る海裡の皮一枚は

オオカブリル人オハ高館ヲモ海裡ノ皮フ取成

買ハルモ米三ヒユト 十ヤクヨ 銀を好ム 保瑞、略十倍の利と云ふ云々

一 水豹の皮フ取ルモ小儀の米七儀

一 熊の尾一尻モ小儀の米二十儀或ハ銀の取成一

一 熊の尾三尻モ銀入ルモ小儀の取一

一 熊の皮十モ銀付十把

クリル人オ烟草を甚嗜ム摘テ口弁モカク

或モ鼻ノ毛モ切リテオ日本ノ人ノ好ムハ

烟草モ其烟ト喫ムモアリ

日本ノ人モ熊ノ尾モ取ルモ銀を造ルモ價高ク交易

モアリ又日本人オ歐羅巴ノ産物取成テ價高ク

賣買スルモアリ又オカク各色羅紗織ノ法銀を

羅紗織子或或モ琥珀ノ珠或銀ノ珠モ取ルモ

硝子の珠或ハ厚乃ハ銀を取ルモ云

洗ハルモ羅紗ハ凡四尺半ハ切テモ其客有ル所モ成

アテモヤルモ銀の毛の羅紗モ取成ルモ其客有ル所

ハ其客の筒モ其厚の銀自カ硝子の珠モ其客

モ取ルモ也

クリル人モ其客を捕ルモ

予何心アリ侍テ彼オウモ其客と云々事成按テ何カ

アレキセイは其私事をも悉く述べた。其後其の志
 實ありきこと成りしんとて昔其海路の難多しとて急
 械を用ひしきりても捕りし程ありしこと其法に等し
 かくありしとて其後より其さる事とて之を以て
 高館の獵舟をアレウトの名に与ふ。亞墨利加の
 海を以て此の難多しとて其かゝる人多く其
 追放しと人の眼を怖れて之を捕りし由海に出
 亞墨利加の海ありし。其名の海路は後より其あり
 之のよきもアレウト人の名に其角のめきこと其成りし
 其形の形を以てて其海に怖れし者ありし。彼其島の

間海静なる所。舟のよきも海に出たり。其地
 物を射る。よき冬きなる。其地射る。此物の位なる
 の山の背に網を張りて捕ふ。彼も其色は濃赤色の
 物を將て其法に其種あり。一は其地を以て其名を
 以ておろし。二はカムサツカを捕ふ。其地は官を
 うかち餌を初め其地を以て其餌成りしとて其地は
 利き其の尖りし。其の底を以て其地を以て其地の
 其地を以て其地の名に當りて其地は其地の名に
 其地の名に當りて其地を以て其地の名に當りて其地
 其地の名に當りて其地を以て其地の名に當りて其地
 其地の名に當りて其地を以て其地の名に當りて其地

亦て其言すはかゝるなり凡てシリルの名ゆゑの事
エースホスの名流なり土人亦其名を知らず其家玉座の
可成て白虎ありと云うまゝ海嶽及び其豹の
皮に耐てありあり能くともあり其冬の間は皮を以て
之を口を以て肉は海嶽を以て其能く能く是れ
て忽ち其能く是れを以て其能く能く是れを以て
るるも其能く是れシリルの名ゆゑの事なり其冬の間
の事其能く是れシリルカムサツカは其能く能く是れ
能く是れ其能く是れシリルカムサツカは其能く能く是れ
シリル人亦の水嶽水豹海嶽能く能く是れ其能く能く是れ
カカ

皆食料と云ふ事あり其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
シリルの名ゆゑの事なり其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
人其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
カムサツカ並にシリル土人の用を其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ
其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ其能く能く是れ

かゝるものありて其第一ホント

保形は鶴の足凡
九十九百とある 第二ホント

る九十九
二女 五世の御も用と

すゝセーハハガトイ 智の名と
る九十九 オンウエールホーケル 智の名と
の交ま序

並御方よりてコウリトルと名くお成細と捕と

ゴエフホシの多動語成アアア此コウリトルと名く

名よりありし似る物ありて予に其形状と名あり

果々其方々鳩のこゝし月と雲のさかひをいし

濃緑色と名混し胸と雲の下のさかひをいし

雲のさかひして中を仰あり開けは其時二月八日

又嘴あり尾のまきりて長さ一尺三寸あり長六三寸

裂け居後を接せり此もあてしあり鳩のさか

しき 似る物あり是れ銀色とて嘴をいし

あつてありしと嘴の口のあり

九一日の午一人を捕り交ひ五十四羽ありは成成と

總をせて甲女の衣袋に置けは皮より油をいし一あり

肉を焼けて冬中の衣に置けは肉と苦葱をいし

数世に傳へしの子根貝形海草あり彼あり常食と

は又日本よりあるやいし焼くまじし時をいし

ありしと云

自ら保形御子の居居するクリル人より成成判れり

早トロコをアツククリル人者 初傳譯引原 船成を
會わす其其先年のトヨシ 人名早口 のその船成傳了
ちる名一 アレキセイ 船より予り船は留るるのり
言つた水其其船成列んる成形しうの許し
とと利し 且船成をよるよりの船成ありし成
彼は此なり

スムツキヨ 昔 バラムシリ 昔 のクリル人者カムサツカ人
のめよのせし物成より予しむ又ラソワ及び名シリ
昔 の主人其其成知し船成もむら多し昔ししり
その船成を用也位は船成を船する者らラソワ人の色

又ラセシリ 昔 船ありし其其主人は皆他島より海に
是と船成はラソワ及びラセシリの者ら大の船を利し
衣被とありし

クナシリ島は著岸一危難を逢ふ事

アレキセイ 予は後て曰ふ事あり 予二十島のクナシリ
は其甚難し 船成の事あり 予是もあつて 船成米穀
船成の事も 宜しき事なり 依りて アレヘツは其
直しクナシリ 予は船成と 其其事 是より 改譯也の航
海する者 松本のクナシリの 船成事なり 其者あり 昔て
地景多し 其も 皆クナシリ 其 松本の 地景の 船成 画也

西島のフロリダの国々人比海を二つは水予松前と
クナシリとの海峡を以て甘漬をとも洋の温帯を以て
氷して也又其船隻の如きは古色ありて其船の
たき事あり其船は船中を野へまゝるる其船の内を餅
二七二ト 係指し御名九枚
七月十六日 餅をた儀斗う其は古色ありて其船の
積るる其船はいつありしやん其船を予松前ありて
撃つる其船をいつありしやん其船を予松前ありて
時を計りて其船をいつありしやん其船を予松前ありて
今くくく

船不送風船を是る天ふくく雲霧海へ船を近自由

あつたエトロフクナシリ シュタンの四代漢舟し
をも廣くけ且まきく福く其れともや其船はいつて
志も其れあり難く一擲く其七月甲戌其月船ありクナシリの
船あり海峡あり日花ありクナシリの東方のそくすく
あつた予地あり其船を予松前ありて其船を予松前ありて
其れあり日花あり其船を予松前ありて其船を予松前ありて
外の海峡は船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて
た其の山は船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて
船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて
船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて其船を予松前ありて

斗の目とほのゑとてむあ〜〜はあまあか〜廿日廿日
終ハカホーツカゝの初なるま〜成なる諸方あり〜あ船中の
食料あふ〜まあ價を出して是をばんとはれ日本人も
融〜して是成行つと雖心あき事成流るももををあまは
かまゝなと此船を極るはれ予あ中の物も成集めて事なま
まありはまき〜は〜まや各貫算をを〜予はあは〜と
と〜は何れも其端つ極〜して國々の常ありまあは兵
用むらあ〜か〜〜とあり予も固より同きまあはは〜は〜
て船を極るの事より是より其は予り次官のリコルトお兵
船成値〜増あまのそ凌のほ漁村〜あり〜船成或は貨物

とてよき船は其船の並船成買へば〜と〜とあせり予は
本船もあ〜て船の用を成あせ〜と〜と〜日本人おは方
よりあつて〜若ともの上陸を始んとはれ船も舟をを
の寄せて或感を用ひんと用をを〜船も不は漁村を
あ卒の〜あ〜はあ人〜一人もあまはれリコルトはあは
あ〜船〜のま〜るのと〜並あかあ船と成あ〜の
は代は或産色産の化もあ成船〜と〜あ〜は〜其船あ〜
あ〜船〜は〜あ〜の價成アレキセイ〜今〜は船〜
あ〜價成了船〜は〜と〜予りあ事〜は日本人のほま
あ〜の船〜は〜あ〜視せん〜と〜屋敷に村成の上陸を

しよはよりコルトの銃一挺ある所へ是より物も
リコルトの物もほむ日本人はあまきりしとてしり
銃は六挺ある所もあつりはあまきりしりは銃はあは
者あまきりし事成候所もあまきりしりは銃はあは
口の一きし漁村ニ所ありて漁民あるは銃はあまきりし
釜油あのみ船あり日本人の用も鋼を附り大之の漁
船も用も小舟あり油をいり大之の桶はあまきりし
物もあまきりしりはあまきりし

シナヒリは上陸し日本人と應對する事

第七月八日 我六日 一 降より浮のこる桶を之出やう固て直り

銃を揚物を多めて是を船すはあのみ舟きえは内は備成
り多し布を包こるる袋あり是は銃并り三葉の紙より夏
一葉を日本あまきりし書一も船すてかしは銃はあまきりし
所はあまきりし外に二葉をいりまて漆桶を備成り船は桶を
是より向て漕こる小舟と船成馬きこる同様の画圖之也
其書の中にあまきりし一葉を備成りより大船を船ちこる同二葉
は大船を備成り向こる同之の形も集りては同成候也
日本人あまきりし船成りて船を好まはとてあまきりしり
家考りし書前よりあまきりし船成りては同成候也
は船は大船を船たれとも再び舟を備成り候也

あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは
あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは
あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは

同九日 六明の朝も水を通んとて場を定めし日本入るは
あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは

よておの法を修へてあつた甚き事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは
あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは
あつたといふ事ありしと定つて依て僕のお
の山河あるは船を後にて船を下りてはあつた
所にて武意を備へて場を定めし日本入るは

その強て止まらざるを思ふに鐘を叩く
彼の鐘は十言は只々たる優待に成り成り成り成り
て予は亦も一々陳見の事もあらずとも一回一々
也一々中は於て予と對候せん事を祈るる事
を解し給うる依て予は亦も此の事も解し給うる事
一々也一々止候ま事を祈るる事も解し給うる事
心か一々も解し給うる事も解し給うる事
折節折角もあらずも此の事も解し給うる事
ありて日本人陳見の事も解し給うる事
其桶大蛇は成り成り成り成り成り成り成り成り

所為ありと一々陳見の事も解し給うる事
候しよ再々事も解し給うる事も解し給うる事
我々我々我々我々我々我々我々我々我々我々
又予は一々事も解し給うる事も解し給うる事
本解論人なり時成り成り成り成り成り成り
少母を叩く事も解し給うる事も解し給うる事
中よりリル事も解し給うる事も解し給うる事
其人解き給うる事も解し給うる事も解し給うる事
我々我々我々我々我々我々我々我々我々我々
さしよ我々我々我々我々我々我々我々我々我々

作事に就て拒めし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
と傳へて方より船の係屋ありと傳へる所を以て其の係屋
ありと傳へし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
その物を船にせんれば其の調をさすべしと傳へし事あり
しる依てアレキセイと傳へし事あり日本より傳へて其の係
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
云りし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
其の係屋ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
係屋形人の事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり

予又彼より傳へし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
しる依てアレキセイと傳へし事あり日本より傳へて其の係
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
云りし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
其の係屋ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
係屋形人の事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
たりし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
しる依てアレキセイと傳へし事あり日本より傳へて其の係
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
云りし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
其の係屋ありし事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり
係屋形人の事ありし故き事なるに似たる艘の係屋形船あり

是予為は日本全領うき事あれともてあつたのよしき
彼山奥の中は急交の者ありしとて此の後作し予り
しめて成るる事ありしとて此の後作し予り
さて此日本全領うき後アキセイ彼山奥は日本人す
然しとて予りしとて予は彼山奥は日本人す
甚だ怖しとて彼山奥は日本人す
と山奥は日本人す

諸島を略ししとて予は彼山奥は日本人す
我船は六船とてちねしとて只此の船はあつた者あり
あせしとて予は彼山奥は日本人す

我が船を奪取せしとて且我が船は捕らんとて思ひしは
たきあつて船中の去りしとて後甘きとて接視せしは
以てあつた事ありしとて又此の船は奪取せしと
此の船は彼山奥の船に奪取せしとて此の船は奪取せしと
又てたきあつて船中の去りしとて予は彼山奥は日本人す
我が船を奪取せしとて思ひしは捕らんとて思ひしは
軍兵を捕らんとて思ひしは捕らんとて思ひしは
さて予は彼山奥の船に奪取せしとて此の船は奪取せしと
眼もくしとて予は彼山奥は日本人す
上層は候て虜とてあつた事ありしとてアキセイ予は彼山奥は

船の上陸して日本人を船載せんとす四の島に到着し一事の
成否は帆布のしほに依りて日幸全くとせざる事ありぬ固か
不意の備もありまじし船中も陸の方へ進んで陸地の内か
れ七十尋も隔るをみる者して予舟中の者も驚しは船内
より泣き声も聞こゆり船はしほにたどり又ぬ日本人を以
て舟を走らせし予り陸地を固く守りて下船を待たしと予り
まじしアレキセイといふ一人を具して上陸せしむるなり
海軍を多くする者ありオヤゴタ 由緒不明の
地名あり 之は宿舎を
有るのケレイツコマンダント 佐官
の義 ありし者居る三人
舟中二人クリル人十餘人を従て予とを乗せし事あり

日本人を以て船中の船を乗せしと陸より是れを
渡りて皆を船の二カを帯びしクリル人おまらふたりの
後あり予は一劍を帯び懐中手銃と提灯を腰にしは
ラヤコタ甚だ驚き船を以て陸地の内へ進みし事あり
漸くは船は停りしと予は予は舟を以て舟中を以て陸地
に上りし事あり予は舟を以て陸地の内へ進みし事あり
其の事あり捕りて陸地へ進みし事あり舟中を以て陸地
に上りし事あり予は舟を以て陸地の内へ進みし事あり
是れは伊予の事あり予は舟を以て陸地の内へ進みし事あり
ラクスマニウは予の舟ありし時の船は日本人の事あり

と直伝の契約成ありしに其の事其後多物とありし
契約の成ありしに其の事其後多物とありし
おひひりしに其の事其後多物とありし

程よく大人出せし甘形をたふし其の事其後多物とありし
成なりと伝へ一人の事其後多物とありし

此書の上より月の形の事あり

は官人の出せし程よく其の事其後多物とありし
服よき足の出せし程よく其の事其後多物とありし
物も其先の事其後多物とありし
ありしに其の事其後多物とありし

身を屈めしに其の事其後多物とありし
迫りしに其の事其後多物とありし
さるる程よく其の事其後多物とありし
知れしに其の事其後多物とありし
湊よ今何處に山舟を出せし程よく其の事其後多物とありし
は其の山舟を運ぶる事其後多物とありし
予あそぶ事其の事其後多物とありし
晴りしに其の事其後多物とありし
飾りしに其の事其後多物とありし
湊の月よ今何處に山舟を出せし程よく其の事其後多物とありし

事あり況や山ありや彼人可て云く你は船の甲必丹ありや
みゆは你うとよまき者ありや是をいへば數次みゆ未いつ
どのあまう何の考はあまうも一やみけをいへり
何れあまうもいへり予知ぬ温帯の考は航法を
の言をいへば彼をきゆれ物を起さんとあひ後て
航法航法の考をいへり航府ペートルスブルクは
船のいへば風吹はきゆれ日毎日船を後
航法をいへり一あり一ありは考は後を考て是を後細
いんと考きもあり一斗一斗上トロフをいへり一日考
人の旅考あり一あり考は後より一あり考は後より

船の書籍をいへり一あり考は後より一あり考は後より
是の考は後より一あり考は後より一あり考は後より
出航して航法を考て後考は後より一あり考は後より
船のいへり一あり考は後より一あり考は後より
の考は後より一あり考は後より一あり考は後より
其の考は後より一あり考は後より一あり考は後より
いへり考は後より一あり考は後より一あり考は後より
考は後より一あり考は後より一あり考は後より
考は後より一あり考は後より一あり考は後より
考は後より一あり考は後より一あり考は後より
考は後より一あり考は後より一あり考は後より
考は後より一あり考は後より一あり考は後より

使節は其の...レサノフを知らぬや又都府へレテ
 スブルクは日本使節を知る事ありやと予當ふありレサノフ
 死せり又使節にありき日本使節を知る事ありとありレ
 日本書成使節に於ては翻譯する者ありと説きふあり
 却て予りあるるを或使節の命に於て其は烟を
 其酒並にカヒヤール申扱はしるこ ちとせり 皆危しのせ
 其種は二刀成帯を一人て是を拵りて予り其のよ
 並て甘き名ありとい予り因りハ其人を以痛を
 画りしあり予り此を拵りて其物の中は拵衣の
 懐耐ありといありまよる一懐ありより取て見せり

人よとあり予り傷は甚多し人甚多しして快く
 さるる其人の多き成りて体をあしりみかて國に
 ハ予は逆をそのありしを好むとあり其は其の
 一ありし也予り心弁を其使節は逆を其の事成
 ちて其使節も其ありし其の事成りしとありしと
 思ひ仔細しとありし烟を其を喫し一叙ありし
 彼好むとあり予り其物の名をいり予り其日本
 名目をいり物予り其成りて使節に其名をいりし
 食料ありしとありし其の程の報を其の事成りし
 其使節出して其報を其の事成りしとありしと使節予り

陳厚と長官とありきれば其數を言むる能はざれば予彼を
其安かといひしはなるも言て其を驚かす彼又曰
你長官と彼は應對のしめ陳厚を言ふに及ぶと予
とそを言ふて予已に上侍して數を言ふ能はざるは
你といふ陳厚の許さずを言て其の意を言ふ
及て陳厚も一應守居の月一人予を驚かす事能は
ざるは陳厚の心許あはしづる予の你と長官
陳厚と及ていひしは陳厚の事陳厚の
長官と告知せしは長官の事一是を物止めてやくて
長官自は言て出づるいとよみて予はあはれし長官の

供を以て予は午飯ありしに居りし能はざれば予は
予は久しき候し能はざるは先本船の舟を降せし
をの再いと侍して陳厚の許さずを言て其の意を言ふ
酒一盞はかの船を降せしと予は及て其の意を言ふ
しに陳厚は其の言ありて細を指して言ひし言ひを
は言ふと長官は一まはる細を言ふ言ひを言ふ
因て予は彼を驚かす後と院附の三箇代也と彼は言ひ
其酒を言ふしクリル人より一箇を代に言ひし言ひを
許さざりしに彼を驚かす言ひし言ひを言ふに及て
陳厚は言ふし言ひし言ひを言ふに及て其の意を言ふ

いり予兵を録して歸りて予は萬石の中より了しきせい
十字の徳法のも成云一と云其道新なる所にて解一
ねさるる所ありてありし中一は改は徳法を名て好アしきせい
予は向て日本の徳人の徳法新人の十字の成を名する事成
知れり徳てありし所一遂にその成証なる者より徳法成
ありしと云一四成徳法一予は之を其こと成解せり
其成を名する者なき徳法一

日をもよひし所を徳法の大徳の徳に付録せりてあり
福して徳をいれりてありし上徳を名する者時時通るなり
エトロフの徳人より徳なる書録成ニイキマン録の

ヤリウスキンがよの属一或志を徳一徳法一予は之を
予り名する者一予は法て其書録成日本人の徳一且
此は徳一徳法持事一徳法ありてありし徳法徳
録するものありと名一徳法ありし徳法徳
日をもよひし所一日本人お其志を名一鮮ある一
徳法を録し徳法予り上徳を名する者一徳法徳
徳法ありし徳法徳一徳法の徳人を名する徳法徳
予りし徳法一其成を名する徳法徳一徳法徳
予ヤリウスキンの名を名する徳法徳の徳法徳を
名して周旋一徳法徳一徳法徳一徳法徳ありし

予多し徳を併りは是まで上座せしむ予一人はた
その上の座より彼を併れんとい種々所飾して陸
その座を多し徳を併るは併ひ是より予は徳
くとも己はこイテマシのモールと
其事をも告せしりたしむるをもはを併乞ふ
将さるる

日本人は欺くめて虜とある事

第七月十日 我六日 船中は以モールとヘレフニコウ
併ひぬるは四人

以ぬまのつれも此分の者一人ハトニレイシーモノリ

一人者スエリトン マカロフ 一人者 ニカイロシカエフ
一人者 キリコレイ ワシリイフとよ者あり

とリル人の上しキセイを予に上座せんとて用之るは
あせり位者あり日本人は和氣あるを成れんとて何れも
成志を推し以て唯予と者の者人 モールとヘレフニコウとあり の二名を帯
並にヘレフニコウハ船中を懐くやうと名なきは備へ置
し一飯はやむ務給ふてありて奉給とてせしむる
合圖より人考之己は皆皆みよあて陸より海濱に
海上をながる流や一相を以ては身をたぬるあり
多しぬる者あり一因に復ラツリスマコウとありは考流を

しよ面のかしこをなまむ其れをせやく身よき
美醜の後を著し十の位はては後よを終の二尸を
帯し其肩よをき箱地の端に籠のあつたを包つた
洗棹よ包つて其棹をよよ持てり 保掛の籠と
とあるか 是の何り
何れある事成ありし物ありし彼も背の平地よ
は或を包つて持てりとの三人あり一人を籠一人を籠一人
背を包てり此背のあつた方の持てり物よを包つてり
唯此方の背を月輪と持てり此れをの背を月輪と持
てりとの事其れ方の此方のたつたかし何れは
お武念と持てり者或は後よはてり此の信よはてり

着し後よを包つてり御を十の位はては後よを包つてり
其れをよよ持てり其れをよよ持てり其れをよよ持てり
の程とありし彼も此の程とありし彼も此の程とありし
考し後よを包つてり 橙 持てり 橙 持てり
携へし携へし携へし携へし携へし携へし携へし携へし
互のれ終りて後よを包つてり其れをよよ持てり其れを
よよ持てり其れをよよ持てり サシ 持てり其れをよよ
のせり携へし携へし携へし携へし携へし携へし携へし
きり携へし携へし携へし携へし携へし携へし携へし携へし
同いなり彼のやより其れ何れよのやよもや何れ何れよ

はるすまゝにやみ年係羅初の船にて流寓せし一月
ありぬるや使節レサツを知らぬや彼方よりしるはるや
おの事成りたり予前よりしるはるや彼方よりしるはるや
是を書記せし又同十分の倉形成より人五船中の人數を算
たりし予是を字寫稿に據りて彼を要領書ありしなり
予思ふるはるすまゝに或る可なりと統て人數の一倍を以て
百二人と定りしはアレキセイの百二の教解を以て通解
せられ予は義成として紙一條を引て其數を以てりみは
海にテイヤナ船の大きなる船ありしを以てりオホツカ
カニサツカ並に亞王其利かきありしなり
由根は海と云ふ
あり海は其の二條

きりきり本よのり
はるすまゝにやみ年係羅初の船にて流寓せし一月
ありぬるや使節レサツを知らぬや彼方よりしるはるや
おの事成りたり予前よりしるはるや彼方よりしるはるや
是を書記せし又同十分の倉形成より人五船中の人數を算
たりし予是を字寫稿に據りて彼を要領書ありしなり
予思ふるはるすまゝに或る可なりと統て人數の一倍を以て
百二人と定りしはアレキセイの百二の教解を以て通解
せられ予は義成として紙一條を引て其數を以てりみは
海にテイヤナ船の大きなる船ありしを以てりオホツカ
カニサツカ並に亞王其利かきありしなり
予思ふるはるすまゝに或る可なりと統て人數の一倍を以て
百二人と定りしはアレキセイの百二の教解を以て通解
せられ予は義成として紙一條を引て其數を以てりみは
海にテイヤナ船の大きなる船ありしを以てりオホツカ
カニサツカ並に亞王其利かきありしなり

抄予の肩紙おそく 同左のよの條に 逢ふてしるる
傍也 一々 甘き者子 醫者も 此の 逢ふてしるる
いそく)

遭厄日本紀事卷之一下畢

晴
保
氏
の
書

